https://www.daitoken.com/ ISSN:0286-6854

大学の図書館

第42巻第5号（No.594）
2023 5

目　次

新年度を迎えた図書館で思うこと …… 中川恵理子 … 53
特集：大学図書館・図書館職員の研修　～「学ぶ」と「育てる」の両面から捉える～
図書系若手職員勉強会について …… 福嶋　涼 … 54
体験記：情報システム統一研修を受講して …… 山形　知実 … 55
オンデマンド型遠隔講義でヘルスサイエンス分野の基礎を学ぶ …… 棚次　英美 … 57
あらためて研修とは …… 青山　史絵 … 58
小さな音楽大学図書館より――こんな研修求めます！ …… 野川　夢美 … 60
参加報告：2022/2023 年度関東地域合同例会開催報告
…… 東京地域グループ … 61

新年度を迎えた図書館で思うこと

中川　恵理子

4月から新年度が始まりました。新年度は大きな変化の時期です。大学は新入生を迎え、学生たちは次の学年に進みます。業務レベルでは、部署の変化、人員の変化、担当の変化、職位の変化などがあります。みなさんも、それぞれの変化の中で、慌ただしい日々が続いていることかと思います。

毎年、この時期は、「何事もなく無事に終わろうなんて贅沢はいわない、とにかく1日1日を乗り切り、積み重ねていく」を目標に、日々過ごしています。ということで、この原稿を書いている私は、1日1日を積み重ねて、念願のゴールデンウイークを迎えた私です。そして、この原稿を読んでいるみなさんも、新年度の最初の1か月を乗り切ったみなさんですね。お互いにお疲れ様でした。

今年度は、新型コロナウィルス関連の規制緩和に伴い、新たな変化も求められています。金沢学院大学図書館では、文部科学省の指針を踏まえて、マスク着用の義務化や座席の間引きなどを見直しながら、全員が安心して利用できるような運用を模索しています。また、コロナ期の中で、登校や図書館の利用に制限がかかり、来館者数は落ち込んでしまいました。学生が離れてしまった図書館に、これからどうやって学生を呼び戻していくのか、今後の課題となっています。

今までもこれからも図書館や図書館を取り巻く環境には変化があります。変化に対応し、利用者のニーズに答え、よりよいサービスを実施するためには、それぞれの図書館員の自己研鑽が必要です。ただし、これは1人で頑張れというわけではありません。同じように図書館をよくしたいと思っている人が周りにはいます。図書館をよりよい場所にしたいと思う人々が集まり、館や立場を超えて、お互いに協力しあいながら、成長していく。大図研はそのような自己研鑽の場ではないでしょうか。

（なかがわ・えりこ／金沢学院大学）

特集：大学図書館・図書館職員の研修
～「学ぶ」と「育てる」の両面から捉える～

学術情報流通のあり方がますます多様になるに伴い、大学図書館が扱う資料やサービスの種類もさらに広範囲に及んでいます。学術情報流通やそれを取り巻く資料・サービスの多様化に応じて、大学図書館で働く職員も多岐にわたる業務に対応するために資質、あるいは仕事の質を向上させる必要があります。

「大学図書館では研修が充実している」とはよく言われることですが、上記のような状況において、研修は正に資質や仕事の質を向上させるための手段の1つと言えます。本特集では、大学図書館職員の研修について、職員同士の自主的な取り組みや外部の研修参加事例、更には研修の理想のあり方についての論考をお寄せいただき、「学ぶ」と「育てる」の両面から捉えるべく構成しました。

（担当：東京地域グループ）

図書系若手職員勉強会について

福嶋　涼

現在、私を含めた東京大学の図書系職員を中心に、若手職員同士の研鑽と親睦を目的とした勉強会グループを運営しています。本稿では、この勉強会グループの概要･活動内容･活動事例・課題・今後の展望について紹介します。

このグループは2021年に、入職2年目の職員を中心として発足しました。入職年度が近い職員に声をかけ、現在では10名ほどのグループになっています。東京大学に在籍している図書系職員が中心ですが、他大学に出向した職員や他大学に在籍している知り合いの職員などもメンバーになっています。

活動内容としては、月に一度Zoomを使用して実施する勉強会が中心となっています。1回の勉強会の長さは1時間とし、事務連絡10分、発表35分、ディスカッション15分という構成をとっています。発表内容は業務に関することであれば自由で、希望者が事前に時間調整表に書き込むという方式をとっています。参加者への負担を減らすため、当番制での発表やテキストの輪読等はしていません。勉強会の日程や発表内容の調整は、主にSlackでコミュニケーションをとりつつ、Googleの各サービス（Googleフォームやスプレッドシートなど）を使用しておこなっています。

活動の事例として、過去におこなわれた発表の紹介をします。発表の多くは、業務で経験した内容を同世代の職員に対して共有するというものです。具体的には、学術情報の検索戦略、所蔵資料の遡及入力、利用証発行のweb申請、図書館移転業務、カビや害虫への対応といった発表がありました。自己研鑽の方法についても共有することがあり、英会話の体験、最近読んだ本、見学した図書館、図書系試験問題の解答、参加したイベント（もちろん大図研についても）などについての発表がありました。また、研究データ管理や転換契約、外国の大学図書館の事例、最新の学術情報プラットフォームなど、各自が興味を

持っていることについての発表もおこなわれています。いずれの発表でも、同世代の職員の興味や感じている課題、生み出した成果などを肌で感じ、刺激を受けることができています。

次に、この勉強会グループの課題について記します。勉強会を継続していくにあたり、最大の課題は、開催・参加にかかる負担の大きさです。このグループでは、参加のハードルを下げるために発表の当番制などは採用していない反面、発表者が固定化・減少しています。普段のコミュニケーションを活発にし、発表しやすい、発表したいと思えるような雰囲気を作ることが求められています。また、会の運営担当者に負担がかからない体制も模索する必要があります。現在は、日程調整・司会・記録作成を3人のメンバーによる交代制で担当していますが、担当者への負担が課題となっています。Google Apps Scriptなどのツールを活用して、できるだけ処理の自動化をおこなっていますが、運営担当者を増やすなどの対応をし、安定したグループ運営をおこなう必要に迫られています。

最後に、このグループの展望について記し、結びとします。このグループに所属する若手職員は、コロナ禍以降に採用された職員がほとんどで、対面での研修を受ける機会に恵まれてきませんでした。そんな職員たちにとって、同世代の職員の問題意識・興味関心・成果物等を定期的に知ることができる環境は、意義深いものだと思います。この横のつながりは、これから職務経験を重ね、お互いの立場が変わっても折々で役に立つものだと思います。この貴重な関係性を維持できるよう、普段のコミュニケーションを大切にし、グループの安定的な運営がおこなえるような仕組みを作っていくことができればと考えています。

（ふくしま・すずみ／東京大学医学図書館）

体験記：情報システム統一研修を受講して

山形　知実

■研修の概要

情報システム統一研修は、デジタル庁（令和3年8月以前は総務省）が実施主体となり、各府省の橋渡し人材の育成、及び一般職員の情報リテラシー向上等を目的として行われる研修である。集合研修とe-ラーニングの2形態で1年を4期に分けて行われ、係員～課長補佐レベルまでのポスト別、及びスキル別に受講コースを選べるよう組み立てられている。

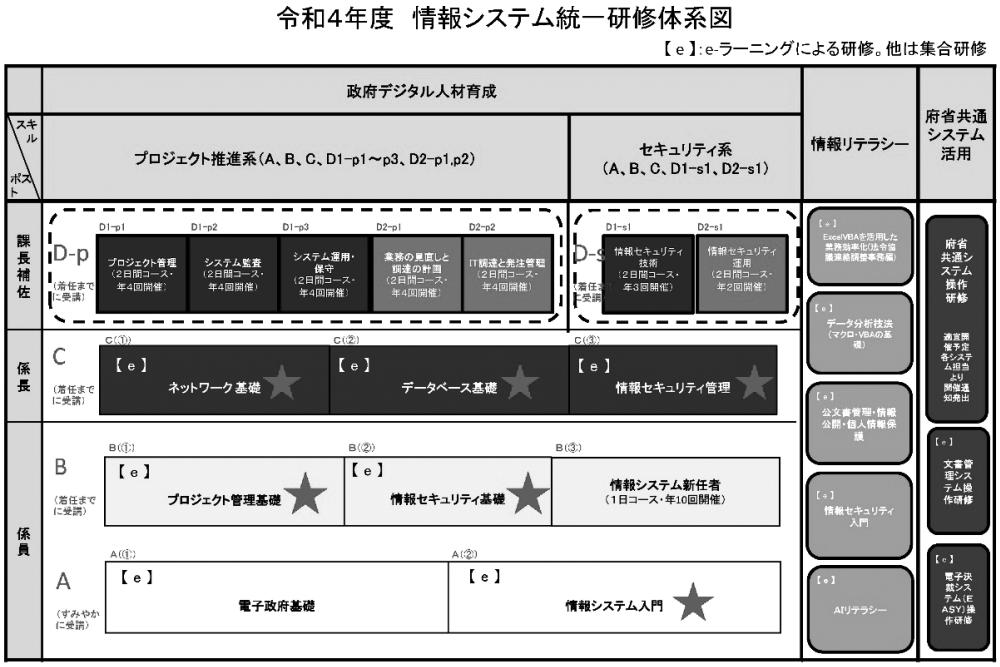
■受講前、研修に期待していたこと

筆者は2022年度より、附属図書館の機器・ネットワーク及びシステムの管理と機関リポジトリ等を担当する部署へ異動となった。

4月1日時点のスキルは、先輩に言われるがまま黒い画面に「ls」と入力してみたものの、私コレ一体何をしているんだろう？というレベルであった。パソコンの電源を入れて係の共有フォルダを開いたが、それが何をしているのかわからない状態、と言えば想像していただきやすいだろうか。周囲にイチからお付き合いいただくわけにもいかず、よって自学自習は必須であり、研修を受講できることはとてもありがたかった。これで色々分かるだろう、と期待していたが、その「色々」の具体が分かっていなかったのが、思えば初心者の悲しさであった。

■研修を通じて得られたもの、業務に活かせたこと

研修は、1年を通じて、レベルAの係員ポスト～Cの係長ポストに相当する6コース（図1の星印）をe-ラーニングで受講した。研修を通じ、ITの基礎理論、通信や認証の仕組み、ネットワークやセキュリティに関する基礎知



（図1）研修体系図（出典: デジタル庁「令和４年度情報システム統一研修実施計画」p3を加工。星印は筆者による追記。
https://www.e-gov.go.jp/sites/default/files/filebrowser/shukan/doc/it-traininng-plan.pdf
（最終確認日 2023.5.13）

識を網羅的に学ぶことができた。

しかし、研修で学べるのはあくまで理論や仕組みの概念であり、担当者として実際に手を動かすための「手順」ではなかった。例えば、研修で「Windows以外にも、Linuxというオペレーティングシステムがある」ことは学べても、そのオペレーティングシステム上で何か操作をするためには、冒頭のlsのようなコマンドも知っている必要がある。また、自機関のシステムが実際どうなっているかは、研修では勿論わからない。教務システムなど学内の他システムとの繋がり、全学的なセキュリティルール上の制約、学外者・一般利用者・職員など利用者種別ごとの端末設定、本学オリジナルのカスタマイズ機能など、実務で考慮すべきことは様々にある。

実務では、「新しく契約したデータベースに学外からもアクセスできるようにしたい」、「統計を見るためにアクセスログを出力してほしい」、「ホームページが落ちているので復旧してほしい」といった具体的な要望があり、それを実現するために手を動かさなければいけない。筆者の場合、研修で学んだことがすぐに業務に活かせたというよりは、先輩の指示や係内に残された経験知を参考に日々のトラブルや要望への対応をしていく中で、振り返ると、あれは研修で学んだあの認証方式だったのだ、と気づくようなことが多かった。

このような気づきを通じて、研修での学びが、次へ繋がる理解として深まっていったと思う。

■研修の意義と課題

やはり、初めの一歩を体系的に学習できるのは研修の価値と言えよう。筆者の場合、研修受講→実務→振り返りを経てやっと研修の内容が身になったと思えたものの、e-ラーニング方式は自分のペースで進めやすく、反復学習が容易なところもありがたかった。また、情報システム部門は必ずしも伝統的な図書館業務ではないため、図書館の内部で網羅的な研修を用意することは難しい。外部主催の研修があり、かつ初心者向けからレベル設定があることは非常に助かった。

研修の案内を受け取った受講者にとって、初心者・中級・上級といった難易度が自分に合っているか、また扱う内容が知りたいことかは比較的判断しやすいだろう。加えて、自分にとって理解しやすい組み立てか、という観点も、学びを実りあるものにする一助になると感じた。新しいことを学ぶとき、まず全体像を掴みたい、全体像が掴めれば細部は自力で埋めていける、という人もいれば、部分が理解できれば自力で全体像を描ける人もいるだろう。例えばジグソーパズルをするとき、まず一辺以上が直線のパーツを集めて外枠から作るタイプだろうか。あるいは、どれか一つのパーツをきっかけに、その近くに配置されそうなものを集めて全体を作っていくタイプだろうか。誰かと相談しながらの方がやりやすい人もいれば、黙々と一人でやるのが性に合っている人もいるだろう。こういうやり方だと理解しやすい、という自分のクセを掴んでおき、その研修の組み立てと照らし合わせてみると、自分に合った進め方か、或いはどう取り組めば効果が高いか、事前にある程度判断できると思う。ちなみに筆者自身は「外枠から作りたい、時々人と相談したい」タイプである。このタイプゆえ、情報システムの中身がどれほど「色々」かよくわかっていなかった当初、ただカテゴリ別のコースを難易度順に受講してもなかなか全容が理解できず、遠回りをしてしまったと反省している。また、理解の度合いが異なる人とも一緒に受講したり、話し合ったりできれば、どこまでが一般的な事柄で、どこからが本学の個別事情なのかといったことを早期に掴めたかもしれない。

多くの研修は、受講して終わり、ではない。その先に実務があり、特に情報システム系の事柄では、研修受講後も日々世の中の技術や理論のアップデートが続いていく。企画側には、研修の後、次のワンステップを自分で踏み出すための参考書籍や信頼できるサイトなどもぜひ併せて紹介してほしいと期待する。

（やまがた・ともみ／北海道大学）
y.tomomi@lib.hokudai.ac.jp

オンデマンド型遠隔講義で ヘルスサイエンス分野の基礎を学ぶ

棚次　英美

1．はじめに

基礎的な知識を体系的に学びたいと思っていたが、時間がなかなかとれないまま、今まで来てしまった。そのため、わかったつもりになっているがわかっていない、知っておくべきことを知らないということを痛感している。基礎を学ぶことのできる図書館員向けの研修は多いが、その多くが平日・集合型開催で参加が難しかった。コロナ禍以後は、新型コロナウィルス感染症拡大防止を目的として、遠隔・オンライン研修方式に変更されたため、かつての実施スタイルだと参加が難しかった自分にはありがたかった。以下、コロナ禍以降に参加した遠隔・オンライン研修の

うち、これはすごい、受講してよかった！と思ったJMLAコア研修について述べる。

2．JMLAコア研修

JMLAコア研修とは、日本医学図書館協会（以下JMLA）が主催するヘルスサイエンス関連分野の図書館員に特に必要とされる基礎知識・技術の習得を目指して構成された研修である。第1回（2016年）から第4回（2019年）までは集合型形式で開催され、第5回（2021年）からは新型コロナウィルス感染症の影響を受け、オンデマンド型遠隔講義の配信で開催されている。

講義は、コア1・JMLAの活動とヘルスサイエンス情報サービス専門職、コア2・医学の学問体系と医学用語の基礎知識、コア3・医学情報資料論、コア4・医学図書館の利用者の特徴とサービス、コア5-1・PubMed検索初級、コア5-2・医中誌Web検索初級、コア6・一般市民への医療・健康情報提供の合計6科目で構成されている。

講義内容に魅力を感じたことと、オンデマンド型遠隔講義で受講期間中であれば、自分の都合に合わせて、好きな時に受講できることから、遠隔講義に変わった第5回から2回連続で受講している。

遠隔講義のため、ただ聴くだけなのだろうと思っていたが、講義の途中で演習タイムが設けられているなど、受講者目線で考えられており、講師の方々の工夫に舌を巻いた。オンデマンド型なので、あれっと思ったところは、いったん止めて聞き返したり、同じ講義を何度も聞くことができるのも、よいところである。

どの講義も説明が非常にわかりやすかった。特に検索関連の講義は、現職の医学図書館員の方が担当されており、実例が具体的で利用者向けの説明にそのまま使えるものが多いと感じた。一例をあげると、ヘルスサイエンス分野の文献検索では避けては通れないシソーラスの説明は身近なものを例にした説明で、このように説明すればよいのかと目からウロコが落ちる思いであった。

また、各講義の最後には確認テストが用意されており、聴くだけで終わらないようになっていること、講義後に質問があれば、講師に質問ができるようになっていることなど、受講者の立場にたって考えられており、研修ワーキンググループの皆様の配慮が行き届いた研修であると感じた。

3．最後に

実務経験年数は増えたものの知識に自信がないので、教えてもらうことがありがたく、楽しいとしみじみと感じる。講義という形で現職の図書館員の方から、教えていただくとなると喜びもひとしおである。情けない話だが、自分は本当に説明下手の人間なので、現職の図書館員の方がどう伝えているのか、どう説明しているのかを聞いてみたいと切実に思っていたため、JMLAコア研修の講師の方々の説明は大いに参考になった。

集合型の研修もよいが、平日開催だと参加が難しい立場としては、遠隔・オンライン型研修は今後も継続して実施されるとよいなと思っている。

（たなつぐ　えみ／
千里金蘭大学付属図書館）

あらためて研修とは

青山　史絵

あらためて研修とは、『日本国語大辞典 第2版』を引くと「学問や技芸などを、みがきおさめること。また、ある職域で、職業上必要な知識や技能を高めるため職員を一定期間教育することやそのための講習をいう。」とある。念のため『新明解国語辞典 第8版』

も引くと「その方面に必要な知識・技能を確実に身に付けるため、特別な勉強や実習をすること。」とある。似たような言葉に「セミナー」があるが、『日本国語大辞典 第2版』には「研究集会。討議も行なう講習会。」とある。若干？大分？温度が違うように思うのは私だけだろうか。この特集の研修の定義を確認していないが、セミナーを除く場合、更に“みがきおさめる”“確実に身に付ける”のが条件であれば、私がこれまで受講したと言える研修はぐっと絞られる。

私は2020年度より図書館事務室事務長（大学職員としては課長、部下は派遣・委託スタッフも含め約13名）を務めさせて頂いており、この4月で入職31年目を迎えた。管理職というだけで特段お知らせすべき研究成果等はなく、いま一つ説得力に欠ける気もするが、折角お声がけ頂いたので、自分が受け役立った研修という視点でご紹介しようと思う。

大学卒業後、現職場に入職し、大学とは離れた場所にある新設の小さな大学院図書室に配属となった。専任司書は自分1人、小さいながらも図書館業務は全てあるわけで、大学図書館にいる先輩司書に毎日電話で確認しながら業務をこなすのが精一杯だった。当時は対面で行われていたNACSIS-CATの研修など実務に必須なものを除き研修に参加する余裕はなく、出版社等主催のセミナーに参加する程度が数年続き、はじめて研修らしい研修に参加できたのは「大学図書館職員短期研修」だった。その後40代で「大学図書館職員長期研修（以下、長研）」を受講したが、これからの方々にはこの2つの研修はぜひ受講をお薦めする。大学図書館職員として持つべき知見を丁度よく得ることができるからだ。国立大学職員の方は言わずもがなの研修かもしれないが、私立大学職員の方は必ずしもそうではない。職場の大小も関係するが、大きいほど自身が担当する業務に専従する比率は高いだろう。特定業務のスペシャリストになるのも立派なことだが、ゆくゆく管理職になることを念頭にキャリアプランを考えると、大学図書館を俯瞰できる研修、高等教育や社会情勢の動きも意識しながら大学図書館を考えられる研修は必修と考える。

長研を受講後、私は2つの行動に出た。1つは大図研への入会で、もう1つは「千葉大学ALPS履修証明プログラム」の受講である。まずは後者から。そもそもALPSプログラムが研修？と思う方もいらっしゃるかもしれないが、言葉の意味としては間違っていない。ALPSプログラムの概要は紙幅が限られるので省き、千葉大学のウェブサイト[注)]をご覧頂きたい。長研で学ぶ楽しさを再認識し、更に学びたい意欲が高まっていたところに、学内のとあるワーキンググループのメンバーに抜擢され、「図書館機能の見直しと強化」というタスクに取り組むことになった。いよいよ自力以外の何かが必要となったところにALPSプログラム1期生募集の案内を目にした。まず2年間で受講できる講義のラインナップが魅力的だった。図書館だけでなく大学が取り組むべき教育・学習支援について広く知識と能力を身につけることができそうだった。また「プロジェクト研究」「プロジェクト実習」というコースでは履修生が自身の「教育・学修支援」課題を設定して、コーディネーターの先生のご指導を頂きながら取り組めることも好都合だった。

履修が認められ、取り組んだ研究テーマは「学部により添ったリエゾンライブラリアンの導入：役割分析、ニーズ調査による評価、プログラム作成」で、実際の研究は英文を含む文献調査と読解、サービス対象となる学部・学科の特徴把握（教員の専門分野・3つのポリシーの分析など）、それら分析結果を基にしたインタビュー調査などを行った。その成果は、現在当館で行っている「学科担当司書」「論文テーマ登録」といった新サービスで実現し、副産物として「図書館の理念と目標」、

「中期目標・計画」の設定にもつながった。

大図研では東京地域グループの運営委員（昨年度まで）や現在も継続中の特定常任委員・事務局組織担当をさせて頂いているが、日頃から大図研での経験は研修に近いと感じている。一緒に活動している方々は皆さん知識もスキルも高い方が多く、それを傍で拝見するだけでも得難い経験で、新たな知見を得る機会も多く、本務に大きな影響を与え、フィードバックできることも多い。ぜひ私もその研修受けてみたいという方、お気軽にご連絡頂きたい。

以上駆け足となったが最後に、あらためて研修とは、知識・スキルを確実に身に付け、所属組織・職場に還元できてこそ意味を持つものと考える。

注）千葉大学アカデミック・リンク・センターALPSホームページ
https://alc.chiba-u.jp/ALPS/
（最終確認日2023.5.13）

（あおやま・ふみえ／
東洋英和女学院大学図書館）
aoyama@toyoeiwa.ac.jp

小さな音楽大学図書館より――こんな研修求めます！

野川　夢美

4年ぶりの通常モードで迎えた2023年4月、晴れやかな表情の新入生、次から次へと図書館に押し寄せる学生たち。入職して通算16年目の春、久々の忙しさに慌てながらも、賑やかな図書館に懐かしさと喜びをかみしめて、大学図書館で働く決意を新たにするスタートとなりました。

私が勤める桐朋学園大学は、演奏家、指揮者、音楽学者の育成に特化した音楽専門の単科大学です。大学生は約610名、専任教員42名、職員25名、とても小規模な大学です。図書館で働く職員は5名、調布市内にある2つのキャンパスの図書館を、交替勤務で行き来して切り盛りしています。

職員育成のための研修プログラムを独自に構築する大学の事例を目にしますが、残念ながら本学にはありません。就職して数年の間は上司の指示に従って国立情報学研究所や日本図書館協会、私立大学図書館協会東地区など、加盟する団体や機関が主催する研修に参加させてもらいました。7年目で私自身が図書館の最年長職員、かつ経験不足の課長となってしまってからは、とにかく必要と思われる研修を探しては、業務と調整できる限り参加し続け今に至ります。学内にこそキャリアに応じた研修プログラムはありませんが、改めて周囲を見渡すと、現在は様々な機関で図書館職員を対象にした研修やプログラムが豊富に提供されています。求めさえすれば、そして時間さえ捻出できれば、目的や興味関心に合った研修を、自由に探して参加することができる環境が整備されているということに気付かされます。

しかしその一方で、小さな図書館で経験を積みながら「あったらぜひ参加したい」と思う研修が二つあります。

心から所望する一つ目の研修は、中間管理職として持つべき心構えと求められる能力を知るための研修です。先述の通り、在職7年目の2013年度に課長を任じられて早くも10年が経ちますが、チームの統括や業務の采配がしっかり出来ているのか、図書館の進む方向は正しいのか、チーム皆が働きやすい環境を作れているのか、未だに悩み続ける毎日です。振り返れば中間管理職になったときには既に先輩方は全員定年退職、ロールモデルにできる身近な先輩がいない状況でした。最新の専門知識をテーマにした研修はすぐに見つかる一方で、中間管理職の入り口に立つ人の

ための「熱い研修」はなかなか見つからないと感じます。大学図書館研究会に入会してまだ2年ですが、昨年7月刊行の『大学の図書館』の特集「これから管理職を目指す人に伝えたいこと」を拝読して、所属する図書館を越えて向けられた温かい言葉に心が揺さぶられました。全国で活躍する先輩方による研修が受けられたらと思います。

心から所望する二つ目の研修は、図書館システムのリプレイスに備えるための研修です。これは差し迫った問題なのですが、本学の図書館職員は私を含め全員が音楽学か音楽の演奏を専攻しており、図書館情報学や図書館システムの分野をじっくりと学んだ経験がありません。学内には学術システムの担当部署がないわけではありませんが、システム・ベンダーの選定やリプレイスの工程を主導してもらうのは難しい状況です。小規模大学とは言え、想定される費用の大きさを考えれば当然失敗は許されず、数年に一度、あるいは経験することがないかもしれないシステムのリプレイスをテーマに研修を実施しているところが無いものなのか、必死で探しています。

さて、毎回研修に参加して感じるのは、学んだことを少しでも仕事の中で生かすこと、そして出会った方達と繋がりを作ることが大切なのだということです。分かりきったことですが、意外にも難しい。人見知りの性格が邪魔することも大いにありますが、この春、晴れやかな笑顔を見せてくれた新入生たちのために、図書館職員として益々精進すべく、小さな図書館から一歩踏み出していきたいと思います。

（のがわ・ゆめみ／桐朋学園大学附属図書館）

参加報告：

2022/2023年度
関東地域合同例会開催報告

東京地域グループ

2023年2月19日（日）の13:30-15:00に、関東2地域グループの合同例会として、「オンライン座談会：管理職×若手　～2050年の大学図書館はどうなってる？～」と題したイベントを開催しました。

このイベントは国立大学図書館協会近畿地区の「君も大学図書館で働いてみないか」プロジェクトのアンケートの中に「私が考える2050年の大学図書館」という内容が含まれていたことに着想を得て、2050年の大学図書館について、管理職の方と若手職員の方に語り合ってもらう、というイベントでした。

登壇者は、管理職として三角太郎氏（富山大学）・井上昌彦氏（関西学院大学）、若手職員として立原ゆり氏（東京大学）・橘風吉氏（東京大学）・池田隆平氏（国立情報学研究所）をお迎えし、司会進行は加藤晃一氏（千葉大学）に務めていただきました。当日は56名の方の参加があり、登壇者同士のトーク終了後の質疑応答も活発に行われ、また、アンケートにも様々なご意見や展望が寄せられました。

イベントの開催報告として、イベント終了後の登壇者・司会の方々からのコメントをご紹介させていただきます。

【登壇者コメント】

三角太郎氏
（富山大学／無所属）

現状のテクノロジーからどのような未来になっていくかということを推測するのでな

く、こんなこといいな、できたらいいなという『あってほしい未来』を自由に発想し、そのゴールへ向かって進んでいく、という順序でもよいのではないでしょうか。また、当日に出た「今後生き残っていくために身に着けるべきスキルとは」という質問について補足として、学習支援等は入ってくる学生のスキルがどんどん底上げされていますし、TA（ティーチング・アシスタント）などの学内に担いうる仕組みがありますが、目録・メタデータ的なスキルは図書館以外に担う仕組みがないと考えています。

井上昌彦氏
（関西学院大学／兵庫地域グループ）

登壇者同士の対話の中だけではなく、質疑応答でもいろいろな話題が出て、楽しくお話ができました。質疑が少し押し気味だったこともあり、もっと時間が長くてもよかったかもしれません。会員でない方の参加も多く、いい場になったと思います。

立原ゆり氏
（東京大学／東京地域グループ）

登壇の機会をいただき、ありがとうございました。議論を深めるには時間が足りませんでしたが、このように大学図書館の未来について語り合う機会は貴重だったと思います。

未来を正確に予測することはできませんし、技術革新に伴って変化のスピードもますます加速しています。そのように、あっという間に姿を変える世界においては、思いがけない変化に備えるためにも、普段から未来の「大学図書館」がどうあったらよいのかを想像しながら、日々の仕事に取り組む必要があると感じました。

また、ひとりの想像力には限界があるので、今回のような機会を通じて、立場の異なる多様な人たちとの対話を重ねていけると、視野が広がり、現状の延長ではない「大学図書館」の未来像を描けるのではないかと思います。またいつか、どこかで第2弾があることを期待します。

橘風吉氏
（東京大学／東京地域グループ）

当たるかどうかは別として2050年の大学図書館を予想するのは楽しかったです。また、他の登壇者の方の予想を聞くなかで、自分には無かった視点や知識量の少なさにも改めて気付きました。特に図書館間の協力・連携については、職員同士の交流も含めて今後の大学図書館の方向性を決めていく重要な視点だと感じました。まだまだ経験は浅いですが、27年後も「信頼できる情報源を提供する場所」として大学図書館が認知されるよう働いていきたいと思います。

池田隆平氏
（国立情報学研究所／東京地域グループ）

正解がまだ見えないゆえに話が弾む良い議題をいただき、また発表内容の掘り下げと議題自体の意義の2方向から会話が進んでゆくことが面白く、参加していて楽しかったです。いつかこうなるかしらという漠然とした類推ではなく、こうなったらよいというアプローチで考えてはどうかとのご意見にぐっときており、日頃からこの気構えで仕事にあたるべしと強く感じました。登壇者同士のやり取りや事後のご質問から、今後の図書系はどうなっていくのかということへの関心の高さや熱量を強く感じ、私個人としてかなり気持ちが引き締まりました。

【司会コメント】

加藤晃一氏
（千葉大学／千葉地域グループ）

大学はコミュニティ形成の場でもありますから、今の形も少しは残ると思うので、図書館もその一部になるように思います。またパワーアシストスーツ、AIや遠隔操作等の補助により、身体的なハンディキャップで図書館員を諦めていた方々に新たな道が開けるのではないか、と期待しています。

（文責：東京地域グループ）

2023/2024年度会費納入のお願い

大学図書館研究会事務局会費徴収担当

大学図書館研究会の会費は、会則第 15 条に定められているとおり、前納制です。

> 大学図書館研究会会則（抄）
> 第15条　この会の経費は会費、事業収入および寄付金でまかない、会員は会費として年額5,000円を前納しなければなりません。
> （中略）
> 4　この会の会計年度は7月1日よりはじまり、翌年6月30日に終わります。

2023/2024年度が始まる、2023年7月1日よりも前に、会費の納入をお願い申し上げます。グループご所属の方は、グループ活動費も合わせてお納めください。

詳しくは、別にメーリングリストへお送りします「2023/2024年度（2023年7月～ 2024年6月）会費納入のお願い」をご覧ください。（5月下旬～ 6月初旬送付予定）なお、昨今に事情にかんがみまして、特段の事情があり6月30日までの会費の納入が難しい場合は、ご相談ください。

会の安定的な運営のため、ご協力をお願い申し上げます。

【問い合わせ先】
会費納入について：事務局会費徴収担当　kaihi@daitoken.com

大学の図書館　第42巻第5号（No.594）　2023年5月25日（毎月25日発行）　ISSN：0286-6854
編集・発行：大学図書館研究会　年間予約購読料：送料共6,000円

□大学図書館研究会出版部（出版物購入・問い合わせ窓口）
〒195-8585　東京都町田市金井ヶ丘5-1-1 和光大学図書・情報館気付
Fax：(044) 989-2250　E-mail：shuppan@daitoken.com
＜出版物購入代金等振込先＞ ゆうちょ銀行　振替口座：00140-6-482205 大学図書館研究会出版部
三菱UFJ銀行 越谷駅前支店　普通口座：1403054 大学図書館研究会出版部

□大学図書館研究会事務局
〒105-0013　東京都港区浜松町2-2-15　浜松町ダイヤビル2F
E-mail：dtk_office@daitoken.com
＜会費振込先＞　ゆうちょ銀行　振替口座：00190-2-79769　大学図書館研究会

大学図書館研究会事務局の住所等変更のお知らせ

大学図書館研究会事務局の住所等を、2023年5月15日付で変更いたしましたので、お知らせします。

ご不明な点がございましたらば、事務局までメールにてお問合せをお願いいたします。

	現住所	新住所
郵便番号	305-8550	105-0013
住所	茨城県つくば市春日1-2 筑波大学図書館情報メディア系 呑海研究室気付	東京都港区浜松町2-2-15 浜松町ダイヤビル2F
電話番号	[電話なし]	[変更ありません]
Fax番号	[Faxなし]	[変更ありません]
メールアドレス	dtk_office@daitoken.com	[変更ありません]

第54回大学図書館研究会全国大会情報

3月号にてお知らせしましたとおり、第54回大学図書館研究会全国大会は、以下の日程と会場で、3年ぶりのオンサイト開催となります。

開催日程　2023年9月23日（土・祝）～25日（月）

会場　大阪大学豊中キャンパス

なお、一部のプログラムについては、トライアルとしてオンラインでの同時配信（ハイブリッド）を行います。大会の詳細については、6月号に開催概要やプログラム等が掲載されるほか、大会ウェブサイトで最新情報をお届けしていきますので、ぜひご覧ください。

https://www.daitoken.com/research/annual_conference/2023/

全国大会実行委員会

【謹告】

第54回大学図書館研究会会員総会は、全国大会の前週、9月16日（土）10:00-12:00に、オンラインで挙行します。詳細は別途告知します。

大学図書館研究会事務局 dtk_office@daitoken.com